

## 地域共生社会におけるエンパワメント支援

### ～ふるさと絵屏風活動への支援を通じて～

#### 【はじめに】

国は、2017年に我がこと、まるごと地域共生社会の実現を打ち出した。地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会を目指すものとしている。これは、WHOが定義する“健康”の社会的な側面に光が当てられた。

自身が関わる市民活動では、これまで10年間の地域活動の中で、社会的な健康に着目し、住民たちとの対話から役割と地域愛を育てる支援を行ってきた。

特に住民が主体となるふるさと絵屏風製作活動は、住民たちが気付き、動くことができるよう支援した。

これからの地域共生社会に、どのような支援をすることが住民のエンパワメントにつながるか、取り組みを通じて考察する。

【対象地域】甲賀市 Y 小学校区域 6 集落成り立つ人口 863 人 高齢化率 41.0% 総世帯 313 世帯 (2018.6 現在)

#### 【支援の内容】

- ①ふるさと絵屏風制作での住民との協働、動機付け
- ②住民の主体的な活動の見える化
- ③地元自治振興会や他機関とのコラボレーション
- ④ふるさと絵屏風の活用場の設定(子ども等)

※ふるさと絵屏風活動とは、昭和10年代～20年代の地域の暮らしや生業の記憶を絵にした絵図。Y小学校区の6地域で3年間にわたり、住民が語り、自分たちの手で描き、それを語るにより地域が元気になることを目指した取り組み

#### 【結果】

	Y地区住民の反応、声
従前	こんな地域は何もない、波風は立てたくない歳をとったら厄介者、大人しくしているのがいい 役所や役員がなんとかすべき
取り組み準備	自分たちにできるわけがない 本当にできるのか？
絵屏風取り組みスタート	しゃべるだけなら、いるだけなら パーツなら描けるかも まさか自分がするなんて、だまされた
絵屏風取り組み最中	面白くなってきた、他地区に負けられない 家族に「楽しそう」と言われる みんなで集まって昔のことを話すのが楽しい 仲間の良いところを見つけられた
絵屏風完成	自分たちが作ったんだ わしらはすごいんや、これは宝だ 子どもや次世代に伝えたい やりたい地区を応援したい 語り部になりたい

#### 【考察】

「社会的な健康」支援の鍵となるキーワードの一つに、「人間的なつながり」がある。ふるさと絵屏風制作では、いつもは高齢者として「支援を受ける側」である人が、昔話をしてくれる人、絵を描いてくれる人、にぎやかに聞いてくれる人、その場を和ませてくれる人、できた絵屏風に意見をしてくれる人、お茶とお菓子を用意してくれる人、批判してくれる人というように、「支え手」となる循環を生むことができるコミュニケーションツールの機能を持つものであった。

「80年目にして馴染みの友達の良い面を発見できた」という古老の言葉からも、地域住民が互いの能力や活躍を認め合い、絆を深める機会になったことを伺い知ることができる。

ふるさと絵屏風活動は、身体が自然に動き、外出する、人の中での張り合いや楽しさを生み出した。

かつての自分の記憶を呼び起こし、地域自体に愛情があったことに感謝し、新しい文化を作り、人がエンパワメントしていく、そんな高齢者を若い世代や子どもたちが「すごいんだ」と認めあう地域活性化ツールであることが確認できた。まさに「過去を育てて未来を創る」偉業の場であった。

高齢者になってからも、障がいがあったとしても、「これくらいならできるかも」と自律的、能動的に生きられることを支援していく。「だれもが社会を回す一役となっている」しくみづくり、社会的包摂や多様性を受け入れる考え方と実際のアクションが求められているのではないだろうか。

#### 【結論】

ふるさと絵屏風製作活動を通じて住民がエンパワメントできる支援とは以下の5つの要素が必要であった。

- ① 住民が活躍できる場所や機会を作る、
- ② 住民同士が自由に発言でき、互いを認め合える許しあえる場の設定
- ③ 住民が困ったときにはすぐに相談できる人の存在が必要であるが、決定は住民が行う
- ④ 支える仕組みや環境づくりも協働で行う
- ⑤ 住民の頑張りや、見える形にしてフィードバックする

信頼関係をベースに、住民が主体的に考え動けるよう、ともに社会資源を築き上げ、地域社会の成熟に寄与していきたい。